

表題は、少子化問題にかねてより警鐘を鳴らしてきた産経新聞の河合雅司氏の論説「オピニオン」からとったもので、彼はここでは理系人材育成の重要性を説いたのだった。わが国では、官吏・官僚に理数的な能力や才能が必要であることが、なかなか認められない時代があったが、それは今日まで尾を引いている。

全建運動

全建とは、全日本建設技術協会の略称で、今年（二〇二六年）で創立八〇年になる。この組織は、戦後間もないころに国及び地方の技術系公務員を中心に始まった「全建運動」が組織化されたものである。筆者は最近までその会長を務めていた。

戦前は官吏と言えば、高等文官試験に合格した者だけがエリート街道を歩み、意思決定を行うレベルの官職はすべて彼らが独占しており、あらゆる分野の行政を指揮していたのだった。国土交通省の前身に

文科省こそ、その行政が時代遅れになっていないかと反省すべきだと考えるのは、いま「高校段階から《イノベーション》を興すことができる人材」を戦略的に育成する「などと言っているが、本当に過去の反省を踏まえているのか。これを述べるのは、過去の文科省の指導が理系軽視に過ぎて、あまりに酷かったからである。

今回の産経新聞でも、二〇二四年時点での高校大学の履修分野に大きな偏りがあることを示している。高校生九五万人のうち、理系二七％、文系四七％、専門二〇％、総合五％と、圧倒的に文系が占めている。

大学ではさらに酷く、理工農系二二％、保健系一三％、人文系四六％、その他一九％という有様だ。これでは資源のない日本人が世界に伍して存在を主張していくことなど無理に決まっている。ここには示さないが、大学卒の理系の割合は、G7のどの国よりも低いのである。

先に大学の理工農系は二二％と紹介したが、理工系だけに限定する

激変する 学校教育

国土学アナリスト 大石 久和 Hisakazu Ohishi

建設省があったが、戦前は内務省の土木局にその機能が入っていた。当然、その時代から河川課、道路課といった組織があり、技術職として入省した土木を専門とする技官も大勢いたのだから、待遇もされず、課長職以上は文官が独占していた。先の戦争の末期になった頃に、当時の内務省の技官たちが「技術がわかる職員が課長にもなれないのはおかしい」と運動を始めたのだった。

長にはなれず、事務職が部長を占めたりしていたのだった。これに抵抗した一連の運動が「全建運動」と呼ばれ、これが戦後に技術の専門家が「政策の判断レベル」のポストに就くことができるようになった背景なのである。

事務職側とのいろいろな交渉の結果、当時としては「河川課は重要だから引き続き高文職が担当するが、道路は技官にやらせる」との合意が生まれ、課長職の技官が生まれたのだ。

先に全建運動から八〇年と記したが、この高級職を一部の事務官が独占するという官僚人事は今も続いているのだ。例えば、あらゆる分野の科学技術の振興と研究開発を担当する経済産業省に技術の背景を持った人材が省を指揮するポストに就くことはあるのか。

そして、敗戦を迎え、内務省が解体されて行き、紆余曲折を経て建設省が生まれる過程で、局長級はもとより事務次官にも技官が就く（建設省初代事務次官は技官であった）という流れができたのだった。

国家の予算は経済政策そのものと言っているものだが、経済を学んだり研究してきた人材がほとんどと言えるほどに財務省、特に主計局に少ないのはなぜなのか。また、主計局長に経済職が就くことがきわめて稀なのはどういうことなのか。戦前の高等文官職は、いまは法律職でいいのか。

時代遅れの学びの構造

と一七％になり、OECD加盟国の平均二六％よりも相当に低くなる。この背景に小中学校の時代から、理科離れを促進してきたことがある。

いるようなのだが、そもそも文科省の政策決定レベルには理系人材がいないのではないのか。

文科省は、過去にほぼ一貫して「理科の勉強時間」を削減し続けてきたのである。

明治時代のかかなり初期に日本国を運営するための技術開発や人材育成のために、帝国大学を創設した。大金を費やして海外から「お雇い外国人」を教授などとして迎え、日本の学術振興を図ろうとしたのだった。この一番最初にすでにいまで言う工学部を設け、そこに土木工学科を置いたのだった。

小中学校の理科の授業時間数・全学年
群馬大・岡崎彰教授による

年度	小学校	中学校
1971	628	420
1980	559	349
1992	421	315
2002	352	290
2011	402	403
2020	402	403

かなり遅れてではあったが、京都にも帝国大学を設けたのだが、ここにもその最初から、今日の「工学部土木工学科」を設置した。まさに文字通り「インフラは社会の基礎構造」であることを明治人には理解できていたのだ。

「科学技術創造立国」などのスローガンを掲げていたのは、いったいどの国なのか。実態を伴わない言葉の遊びがあまりに酷すぎるのではないのか。

一九九五年頃から、ひたすらインフラ投資を削減して、防災的にも自然外力への対応を怠り、経済競争的にも、ドイツのアウトバーンにはないミッシングリンクだらけの高規格道路しか持たない現代日本人は、明治初期の人たちに正対することもできない存在になり果てたのだ。

下
言
上
用

K a g e n
J o u y o